早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

琉球弧・八重山諸島における先祖祭祀と農耕儀礼

Ancestor Worship and Agricultural Rites in the Yaeyama Archipelago of the Ryukyu Arc

2014 年 1 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

藤井　紘司

FUJII, Koji

研究指導教員：蔵持 不三也 教授

本稿の目的は、先祖祭祀と農耕儀礼を対象にし、まつりの場にみる来訪という現象に注目することを通して、沖縄の世界観の一端をあきらかにするところにある。なにゆえに来訪を取り上げるのかというと、海域世界の人々のもっている世界観と密接にかかわっているからである。

例えば、沖縄研究の先覚者である柳田國男や折口信夫、伊波普猷らは、他界であるニライ・カナイやその世から来訪する神々の諸観念に注目し、他界観と神観念のふたつの側面から沖縄の世界観の把握を試みている。興味深いのは、これらの先学者は、沖縄を通し、日本人の神観念を構想し、常世の国や根の国などの古代日本の他界との比較・対応という方法を採用していることである。

戦後になると、クライナー・ヨーゼフの文化系統論的研究や村武精一や馬淵東一ら社会人類学者の構造論的な世界観研究、比嘉政夫や牛島巖による集約的な実態調査に基づき、祭祀組織や社会組織とのかかわりにおいて世界観を分析する研究が進んだ。

以上が沖縄研究の粗描であるが、沖縄社会の固有性は、あるときには古い日本の古形や基層的なものであるととらえ、また、あるときには構造論といった生活者の視点から離れた分析がなされてきたのである。そうした視点を一概に否定することはできないが、広範な生活世界から「民俗」とレッテルをはった“標本”を切りだし、その変遷や起源、機能、象徴的意味を探るといった研究姿勢が、ややもすると、実際に暮らしをたててきた人々のすがたを等閑に付してきたきらいがある。

近年の人文・社会科学では、実際に暮らしをたててきた人々のすがたを見落としているのではないかという内省から“生きる方法”という術語に注目が集まり、生活者の実感に基づいた世界観研究という方向へとシフトしつつある。本稿は、こうした研究史を踏まえ、他界から来訪する存在を生きた我々との関係性のなかでとらえ、生活実感に基づき、その世界観をあきらかにすることを目的とした。

沖縄の世界観にせまるといったときに、沖縄社会の対峙してきた自然環境や戦争や災害、政策、過疎、門中化といった生活条件の変化、社会変動といった外圧は、その世界観をとらえるさいに見落とすことのできないものである。日本民俗学者の坪井洋文は、外圧が加わるほど自己の内面に潜在化していた価値観がにじみでるという。その意味において、世界観とは、生活世界とこうした生活条件の変化や社会変動といった外圧とのせめぎ合いのなかでたちあらわれてきた表現なのである。だからこそ、沖縄の世界観をみるうえで、こうした生活条件の大きな変化のなかでこそ、明確な輪郭を帯びた世界観をとらえることができるのである。

対象としたフィールドは、古くから民俗学者らが関心を払ってきた琉球弧の最南西にあたる八重山諸島である。台風や干ばつなどの慢性的な災害を被ってきた地域であり、また、人頭税などの首里王府による政治的な施策により、過酷な生活条件にさらされてきた地域である。

八重山諸島は、歴史生態学の術語でいう「高い島 highland」と「低い島 lowland」からなる。この類型は、島の成因による分類であり、地形や地質、土壌、水文などの自然環境及び、人文環境には、差異が認められるものである。実際、フィールドにおいては、タングン・ヌングンという民俗呼称があり、この術語と対応している。本稿では、基本的に相対的に制約の大きな環境条件にある「低い島」の生活を中心に取り扱った。

本稿は、農に関する第 1 章と第 2 章、先祖祭祀に関する第 3 章と第 4 章からなる。以下では、その具体的な内容を記述する。

まず、第 1 章では、基本的な生活条件をおさえるために、「高い島」との往来実践である通耕を事例とし、「低い島」での生活を組み立てる方法をあきらかにした。方法としては、「低い島」の住民が「高い島」において所有してきた各種地目の記述とその分析、史料や聞き書きによるモデリングを採用した。その結果、「低い島」の住民は、自然環境及び利用できる生態資源の偏在に対応するために、「高い島」において水稲耕作のための水田だけではなく、共同牧場や杣山、畑、そして、水資源の不足を補うための「池沼」や「宅地」などの各種地目を共同で所有し、日常的に利用してきたことをあきらかにした。

さきに述べたように、「低い島」の地質は、琉球石灰岩を主とし、降雨がすぐに浸み込む地下水系の水文環境であった。「低い島」では、焼畑といった土地利用様式が卓越し、乾燥と人為的干渉により、灌木・潅木といった植物相となっている。一方で、「高い島」では、河川系が発達し、ブナ科樹木の優占する照葉樹林を有し、マラリアを媒介するアノフェレス蚊 Anopheles spp.の生息域となっていた。近世以降、マラリアの跋扈と村吏の無策によって有病地に位置する「高い島」の村落は、あきらかに疲弊・衰退し、一方で、狭隘な耕作地しか有さない「低い島」では、その人口密

度が本来的な環境収容力をはるかに上回っていた。一般的に、焼畑を主とする地域では、人口の増加に対して耕地面積の拡大でもって対応せざるをえない。ところが、隆起珊瑚礁を基盤とした「低い島」の土地は限られたものである。そのため、「低い島」の住民は、「高い島」の生態環境を自らの生活領域の中に組み込むことによって、その生活を組み立ててきたのである。

1 章で取り上げた、稲や粟を満載した舟々の往来を謡った鳩間節は、具体的な営為である通耕生活をモチーフとした古謡ではあるが、一方で、このうたは、沖縄の神歌の世界観と過不足なく重なり合っている。在地の神歌の多くが米や粟などの農の稔りを載せたミルクの舟を乞い、迎えることを謡ってきたからである。すなわち、こうした自然環境と対峙する営為は、当然、農の稔りをもたらすという来訪する存在とのつきあい方の“作法”を抜きに語ることのできないものである。

これらを踏まえ、2 章では、農の稔り〔世果報〕を実現させるための、来訪する存在を迎える“作法”に注目し、どのようにたちあらわれているのかをあきらかにした。方法としては、折口信夫のたま論を援用し、まつりの場におけるシラ〔穂積み〕に似せた造形物やまつりの囃子、芸能の身体表現などの比較・分析を採用した。沖縄には、その世界観を端的にあらわす世〔ユー〕という民俗語彙があり、まつりのうたには、この語彙が多く用いられている。その含意は広く、①豊かさ（農の稔り）や②ひとつの区切りをもった区間（農の稔りを実現させる期間）を意味する。

農に関する“作法”に注目すると、この世という期間の始まりと終わりとが大変重要な意味をもっていることがわかる。すなわち、世の始まりには、来訪してきた根下ろし〔ニーウリ〕の力のこもった種子が無事に発芽すること、世の終わりには、その作物が無事に結実を迎えることを祈っており、播種を迎える籾と結実を迎える籾をまつる契機が世の始まりと終わりとを担ってきたことがわかった。コントロールしえない自然環境に対峙してきたからこそ、こうした農の稔り〔世果報〕を実現させる“作法”が生まれてきたといえるのである。

第 3 章と第 4 章では、波照間島をフィールドとし、先祖祭祀に関する問題を取り上げた。“果ての珊瑚礁〔ウルマ〕”がその語源であるこの島では、戦争や災害、政策、過疎といった生活条件の変化を経験してきた。例えば、1771 年の明和大津波とその後の寄百姓（新村を建設し、農産増強・人口調整を図る首里王府の政策）により、島の人口の半数以上（約 55%）が他島へ流出し、島内にとどまった住民は 677 名（約 45%）に過ぎなかった。また、“戦争マラリア”では、第二次世界大戦の末期、波照間島から西表島に疎開した一般住民がマラリアに集団り患し、全人口 1,671 人に対して 552 名が亡くなった。

第 3 章では、こうした状況を前にし、戦災や過疎による絶家にさいなまれてきた島では、どのように絶家を防ごうとしてきたのかをあきらかにした。方法としては、絶家後の屋敷（地）や墓、耕地などの“先祖代々が守って来た預かりもの”の処遇の把握という聞き書きを実施した。これらの調査により、預かり墓〔アジィカリィパカ〕と焼香地〔パカサリィヌピテ／タナ〕という特異な土地利用実践があることがわかった。焼香地とは、絶家した家の墓の焼香の義務を他家が継承する代わりに、それらの家から預かった耕地のことを指し、墓への継続的な働きかけ（焼香の義務）が他家の耕地利用の正統性を生んでいること、また、これらの実践により、家の構成員の絶えた家であっても、他家が先祖祭祀に携わることで“擬制的”なかたちで家を存続させていることをあきらかにした。

第 4 章では、門中化という生活条件の変化を前にした先祖祭祀の問題を取り上げた。沖縄社会では、士族階級の先祖祭祀の規範（門中モデルの規範）が“スプロール”し、周辺地域がそれらの規範を受容する過程でコンフリクトを生んでいる。門中モデルは、明文化しうる禁忌などの明確な規範をもっている一方、在来の先祖祭祀の規範は、大変曖昧なものである。これらを踏まえ、第 4 章では、どのように異なっているのかをあきらかにした。方法としては、個人生活史からくんだ経験を含めた場面分析を採用した。

その結果、門中モデルの規範は、「先祖になる」資格が血筋という“正統性”によって定まる“出自的”なものであり、一方で、在来の規範は、先祖祭祀の“作法”は、近親ボトケへの働きかけの所作としてあり、祀るものと祀られるものとの経験を基にした、生者と死者との関係性によって定まる“生活史的”なものであったことをあきらかにした。

以上の事例からは、来訪する存在を迎え続けることが“生活の無事”を端的に表象することに他ならないことがわかる。すなわち、根下ろし〔ニーウリ〕の力のこもった種子が無事に発芽すること、その作物が無事に結実を迎えることなどの作物の順調な生育を願う心意や、絶家や無縁仏が生じることを防ぐ仕組みは、死後の安寧などを求める“生活の無事”という生活保障の“作法”であり、いったん押し寄せてきた波瀾のなかでもなんとかコトナキを得るといった、毎年毎年の反復する“生活の無事”を志向する固有の世界観を構成しているのである。